九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

対人的嫌悪感情に対する社会心理学的研究

斎藤, 明子
九州大学大学院人間環境学府

https://doi.org/10.15017/903

出版情報：九州大学心理学研究. 4, pp.187-194, 2003-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2003, Vol.4, 187-194

対人的嫌悪感情に対する社会心理学的研究

斎藤　明子　九州大学大学院人間環境学府

A social psychological study on the interpersonal dislike feeling

Akiko Saito (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of this study was to investigate the dislike feeling which one feel toward specific others. First, interviewed 50 undergraduates (19 men and 31 women) about characteristics of others he or she disliked. Study conducted a questionnaire survey of 260 undergraduates (133 men and 127 women). The following was findi ngs. (1)The first analysis was the factor analysis about characteristics of others which subjects disliked. 8 factors were picked out ; dislike toward others which different from subjects, dislike toward others with envy, dislike toward others who have arrogance, dislike toward others who is selfish, dislike toward others who assert extremely, dislike toward others who have similarity, dislike toward appearance of others, and dislike toward way of speaking of others. (2)Inferiority feeling or non - cooperation of subjects influenced characteristics of others he or she d isliked. (3)Compared with women, men disliked others who have arrogance and way of speaking of others. Compared with men, women disliked others which different from subjects and disliked others with envy.

Keywords: dislike feeling, undergraduate, interpersonal

問題と目的

他者に対する好き嫌いについて研究する分野は，対人魅力（interpersonal attraction）と呼ばれ，主に社会心理学において今まで多くの研究がなされてきている。しかし，この対人魅力においては，どのような人に魅力を感じるかという「好き」の側面に焦点が当てられてきて，「嫌い」という側面についてはあまり注目されてこなかった。

数少ない嫌悪についての先行研究の中で，嫌悪感情を直接取り扱ったものではないが，好悪という側面から行われた研究がいくつかある。Anderson（1968）は大学生を対象として555の性格特性語を示し，それぞれの特性を持つ人への好意度を評定させるという研究を行っている。その結果，好まれる性格の上位３つは「誠実な人」，「正直な人」，「理解のある人」であり，嫌われる性格の上位３つは「うそつき」，「いかさま師」，「下品な人」であった。また，齊藤（1985）は日本の大学生において同様の調査を行っているが，その結果，好まれる性格の上位３つは「思いやりのある人」，「誠実な人」，「やさしい人」であり，嫌われる性格の上位３つは「ずるい人」，「人をさげすむ人」，「卑劣な人」であった。また，豊田（1998）は，大学生における嫌われる男性および女性の特徴を研究している。その研究は「女性から嫌われる男性」，「女性から嫌われる女性」，「男性から嫌われる男性」「男性から嫌われる女性」の特徴だと思うものを３つずつ記述してもらうというものであった。その結果，嫌われるだろうと推測される特徴として，「不潔」「しつこい」「自分勝手」などの特徴が挙げられた。また，異性から嫌われる特性は男性と女性では大きな違いがあることや「思いやりの有無」という次元が好き嫌いを判断する上で重要であることが明らかになっている。

しかし，Anderson（1968）の研究にしても齊藤（1985）や豊田（1998）の研究にしても，人から嫌われると推測される他者の一般的特徴について明らかにしたに過ぎない。対人嫌悪の規定因は，単に対人魅力の要因を逆にすればいいというわけではないことが指摘されているが，これら従来の研究のように嫌われるであろう他者の一般的特徴を推測するだけでは，実際に自分が嫌いな人についての我々の実感とは大きく掛け離れてしまう場合があるだろう。現実場面において我々が他者に対して嫌悪感を抱くときには，このような特徴とは関係なく嫌いだと感じる場合もあると考えられるからである。例を挙げれば，一般的に言えば好まれるだろうと推測される特性を持つ他者を嫌いになったりする場合が考えられる。

このように，従来の研究で扱っているものは推測の嫌悪感に過ぎず，それを現実場面においても当てはまるものだとするには不十分である。したがって本研究では，従来の研究では不十分であった，現実に我々が実感として他者に抱いている嫌悪感情に焦点を当てて研究を行うことにする。そのために，被調査者が現在あるいは過去において実際に嫌悪感を抱いた特定の他者の特徴について研究をすすめていく。

また，他者に嫌悪を抱いた場合に，その他者を嫌いだと感じた背景にある自己の側の要因を無視することはで

きない。特定の嫌いな他者の背後には，その他者を嫌いだと感じた自分というものが存在している。他者を嫌いだと感じたときに原因を相手に帰するだけではなく，自己を振り返って考えてみることは相互理解のために重要と思われる。したがって，嫌いな他者の特徴を明らかにするだけではなく，その他者を嫌いだと感じた認知者側の要因についても探っていく必要がある。よって本研究では，被調査者の性格特性が嫌いな他者の特徴にどのように影響しているかについても検討していくことにする。

研究の手順としては，まず，予備調査として嫌いな他者の具体的な特徴について知るためにインタビュー調査を行い，それをもとに質問項目を作成する。次にその嫌いな他者の特徴についての質問項目と被調査者の性格特性を尋ねる質問項目で構成された質問紙を配布し，分析を行っていく。分析方法としては，嫌いな他者の特徴について因子分析することにより対人的嫌悪尺度を作成することを第一の目的とする。また，被調査者の性格特性と嫌いな他者の特徴との関連についても検討を行い，被調査者のどのような特性が嫌いな他者の特徴に影響しているのかを検討することを第二の目的とする。さらに，被調査者の性差についても検討を行っていく。

嫌悪感情というと一見ネガティブなもののように捉えられがちであるが，自分に生じた嫌いだという気持ちは自分にとって重要であると思われる。ある特定の人物をなぜ嫌いだと感じたのかについて分析する視点があれば，他者への理解のみならず自分への理解も深まるからである。そして，そこからさらに一歩進んだ人間関係を作っていくことも可能になるのではないだろうか。

また，日常の生活場面だけでなく，カウンセリングなどの臨床場面においても嫌悪という感情を扱うことは非常に重要であると考えられる。例えばセラピストとクライエントの間においても好き嫌いという感情が生まれる場合があるだろう。そのときにそれが相手の特性によるものなのか，また自己の側の原因によるところが大きく相手を嫌いだと感じるのか，あるいは相互作用的な関係によって嫌いという感情が生まれてきているのかなどと自他の嫌悪感情を客観的に判断する視点は大切であろう。このように，対人的嫌悪感情について研究することにより，自己理解や他者理解を深め，よりよい人間関係に役立てていくための土台をつくっていくことが本研究の目的である。

方　法

1．予備調査

被調査者　大学生50名（男性19名，女性31名）

手続き　大学生50名に，現在あるいは過去において嫌いだと感じた同性の他者を思い浮かべてもらい，その人のどのようなところが嫌いなのかについて答えてもらうインタビュー調査を試みた。得られた回答をもとに，本調査で使用する嫌いな他者の特徴についての質問項目を作成した。

2．本調査

被調査者　大学生260名（男性133名，女性127名）

質問紙の構成　質問紙は主に，予備調査によって作成した嫌いな他者の特徴について尋ねる74項目と，被調査者の性格特性を尋ねる36項目から構成されている。この，被調査者の性格特性を尋ねる36項目は，柳井・柏木・国生（1987）による新性格検査から抜粋している。この新性格検査は文章形式の性格特性テストであり，12の特性についておのおの10項目，計120項目が定められている。今回は，この12の特性について各々3項目ずつ，計36項目を選出して使用した。

手続き　データの収集は，授業中ないしは授業終了後に質問紙を配布することにより実施した。嫌いな他者についての特徴について尋ねる項目についての教示文は「これからあなたの嫌いな同性の他者の特徴についてお尋ねします。現在あるいは過去において嫌いだと感じた自分と同性の特定の人を1人思い浮かべ，以下の項目について，その人をイメージして最も当てはまると思うものに○をつけてください」というものである。「全く当てはまらない」～「非常によく当てはまる」の5件法にて回答を求めた。また，被調査者の性格特性について尋ねる項目については，「次に，あなた自身のことについてお尋ねします。以下の項目について，あなた自身に最も当てはまると思う数字に○をつけてください」という教示文とともに，「全く当てはまらない」～「非常によく当てはまる」の5件法にて回答を求めた。この各尺度ごとに平均点を算出し，尺度得点とした。

結　果

1．因子分析による対人的嫌悪尺度の作成

因子分析に先立って，欠損値を含む20名のデータを除く260名のデータについて，嫌いな他者の特徴について尋ねる74項目の中から，正規分布から大きくはずれている15項目を除外した。そして残りの項目で，対人的嫌悪尺度を作成するために因子分析（重み付けのない最小二乗法，プロマックス回転）を行った。その結果，固有値の減衰状況や因子の解釈可能性などから8因子解を採用した。その結果を Table 1 に示した。

第1因子は「27．性格的に自分と異なっている」「25．自分と考え方が違う」などの項目の因子負荷量が高くなっていた。項目内容から，この因子は自分と異質な相手への嫌悪を表わしていると考えられた。そこで『自分との

Table 1
嫌いな他者の特徴についての因子分析結果

	因子 1	2	3	4	5	6	7	8
《 因子１： 自分との相違による嫌悪 》								
27. 性格的に自分と異なっている	.73	.03	.05	.07	.32	−.21	.20	.13
25. 自分と考え方が違う	.71	−.04	.10	.18	.37	−.22	.07	.20
28. 感情の表し方が自分と違う	.70	.11	.11	.16	.38	−.04	.22	.14
46. 自分と意見が違う	.67	.07	.24	.19	.39	−.02	.25	.21
73. 行動の仕方が自分と異なっている	.64	.11	.07	.02	.28	−.06	.28	−.04
72. 自分と外見が異なっている	.61	.27	.13	.02	.36	.10	.39	−.13
23. 自分が理解できないことをする	.57	−.11	.15	.36	.28	−.12	.13	.19
6. 話が合わない	.46	−.03	.11	.12	.20	−.09	.08	.30
35. 態度の予想がつかない	.41	−.05	.10	.31	.22	−.03	.13	.12
《 因子２： 相手への妬みによる嫌悪 》								
42. 自分よりも優れている	.09	.66	.12	−.17	.11	.32	.03	−.02
39. 自分にとってうらやましい面を持っている	.04	.65	.05	−.06	.26	.37	.01	−.04
37. 周囲からの評判がよい	.05	.65	−.20	−.16	.12	.25	.11	−.22
14. 勉強ができる	.13	.65	.08	−.13	.05	.29	.10	−.01
12. 自分がしたくてもできないことをしている	.09	.59	.10	.07	.26	.17	.14	−.02
61. 自分がいたいポジションにいる	−.10	.43	−.01	.14	.13	.39	.26	.01
5. 弱点を見せない	.18	.41	.14	−.06	.01	.12	.07	−.03
67. 自分がしたくてもできないような服装をする	.09	.39	.04	.14	.22	.33	.26	−.02
《 因子３： 相手の傲慢さによる嫌悪 》								
51. 人を見下しているようなかんじである	.01	.05	.76	.25	.23	.10	.13	.18
48. 態度が偉そうである	.21	−.05	.68	.29	.53	−.03	.21	.30
3. 自分の方が優れているという前提で動いている	.03	.01	.66	.25	.15	.03	.10	.17
54. 攻撃的である	.24	−.04	.57	.30	.57	.10	.19	.15
20. 人のしたことに対して批判をしてくる	.13	.06	.57	.34	.16	.18	.05	.27
45. 気にさわることを言ってくる	.07	−.16	.54	.32	.29	.09	.12	.38
24. 過度に自己主張する	.35	−.11	.52	.39	.47	−.05	.11	.45
53. 知ったかぶりをする	.04	−.10	.45	.34	.04	.03	.30	.34
《 因子４：相手の自己中心性による嫌悪 》								
36. 自分のせいであることを人のせいにしてくる	.07	−.24	.35	.73	.12	.06	.15	.19
43. 相手の迷惑を考えない	.24	−.42	.31	.57	.30	−.15	.07	.19
50. 状況によって態度が変わる	.31	.03	.24	.56	.26	.04	.29	.18
21. 同性の前と異性の前では態度が違う	.07	.17	.15	.51	.11	.04	.12	.22
8. 束縛してくる	.00	.00	.17	.47	.05	.17	−.02	.15
56. 自己中心的である	.35	−.30	.39	.46	.45	−.08	−.06	.16
71. 人の意見を聞こうとしない	.24	−.34	.37	.45	.38	.00	.15	.22
40. ずるいところがある	.05	−.25	.24	.44	.19	−.20	.13	.14
19. 体裁を気にする	.30	.22	.41	.42	.07	.13	.18	.14
31. 自分が絶対にしたくないということをする	.27	−.09	.18	.41	.27	.02	.20	.10
32. 自分の心に踏みこんでくる	.07	−.01	.27	.40	.27	.22	.18	.33
38. 周りの人に気を使わない	.29	−.21	.21	.38	.21	−.12	.01	.18
《 因子５： 相手の主張過剰による嫌悪 》								
55. 外向的である	.37	.33	.20	.16	.71	.11	.20	.07
47. 思ったことをはっきり言う	.47	.27	.32	.01	.69	.18	.13	.09
26. 口調が強い	.32	.13	.43	.17	.65	.05	.08	.24
62. ハキハキしている	.37	.47	.13	.06	.64	.12	.15	.03
58. 自信に満ちている	.32	.28	.51	.18	.51	.05	.29	.18
63. 自制心がない	.34	−.27	.21	.35	.49	−.03	.27	.11
《 因子６： 自分との類似による嫌悪 》								
64. 自分と似たような嫌な面を持っている	−.08	.32	.10	.09	.06	.86	.06	.00
74. 自分の嫌な面とその人の嫌な面が似ている	−.12	.32	.00	−.09	−.01	.72	.02	−.08
59. 集団の中でのキャラクターが自分と似ている	−.21	.41	−.04	.04	.04	.70	.13	.03
18. 自分とスタンスが似ている	−.16	.39	.04	.01	−.06	.55	.08	.01
《 因子７：相手の外見による嫌悪 》								
34. 顔が嫌い	.18	−.06	.22	.17	.16	−.04	.71	.40
70. 顔の表情が嫌い	.37	.04	.25	.18	.23	.01	.70	.37
57. 体型が嫌い	.18	.08	.16	.27	.17	.11	.68	.16
《 因子８：相手の話し方による嫌悪 》								
33. 口調が嫌い	.34	−.06	.30	.29	.34	.02	.40	.73
1. 話し方が嫌い	.22	−.02	.26	.17	.13	−.01	.28	.73
2. しつこい	.07	−.22	.18	.26	.02	−.01	.15	.53

相違による嫌悪』と命名した。

第2因子は「42. 自分よりも優れている」「39. 自分にとってうらやましい面を持っている」などに負荷が高かった。よって『相手への妬みによる嫌悪』と命名した。

第3因子は「51. 人を見下しているようなかんじである」「48. 態度が偉そうである」などの項目が高い負荷量を示していた。これは，偉ぶって自分を見下してくるような相手に対しての嫌悪であると解釈できたため，『相手の傲慢さによる嫌悪』と命名した。

第4因子は，「36. 自分のせいであることを人のせいにしてくる」「43. 相手の迷惑を考えない」などの項目が高い負荷量を示していた。この因子は自分勝手な行動をとる人への嫌悪を表わしていると考えられた。よって『相手の自己中心性への嫌悪』と命名した。

第5因子は「55. 外向的である」「47. 思ったことをはっきり言う」などの主張が激しい人への嫌悪を表わしていたことから，『相手の主張過剰による嫌悪』と命名した。

第6因子は「64. 自分と似たような嫌な面を持っている」「59. 集団の中でのキャラクターが似ている」などの項目が高い負荷量を示していた。したがって『自分との類似による嫌悪』と命名した。

第7因子は「34. 顔が嫌い」「顔の表情が嫌い」などの項目から，『相手の外見による嫌悪』と命名した。

第8因子は「33. 口調が嫌い」「1. 話し方が嫌い」などの相手の話し方そのものへの嫌悪であると考えられたため，『相手の話し方への嫌悪』と命名した。

信頼性の検討

尺度の内部一貫性を示すα係数を求めたところ，第1因子から順に，.84，.80，.81，.78，.81，.81，.77，.71であった。信頼性係数には明確な基準はないものの1つの基準として 0.7程度の値が考えられている。本研究ではα係数についてこれを満たす十分な信頼性が得られたと判断した。

2．被調査者の性格特性が，嫌いな他者の特徴に及ぼす影響

被調査者の性格特性が嫌いな他者の特徴にどのように影響しているかを検討するために，強制投入法による重回帰分析を行った。目的変数は嫌いな他者の特徴について抽出された8つの因子それぞれである。説明変数は被調査者の12の性格特性のうち，他の変数と特に相関が高く結果を歪めるおそれのあった「抑うつ性」と「活動性」の2つを除いた10の性格特性（社会的外向性，神経質，劣等感，自己顕示性，攻撃性，持久性，進取性，共感性，非協調性，規律性）である。目的変数においても説明変数においても，その尺度ごとの平均点である尺度得点を用いて分析を行った。分析は，①男女合わせての対象全体による分析②男性のみの分析③女性のみの分析，という全3パターンで行った。

男女全体による分析

まず，対象全体をまとめて行った分析について述べていくことにする。「因子1：自分との相違による嫌悪」を目的変数とした重回帰分析では，決定係数R^2=.088

Table 2
「被調査者の性格特性」と「嫌いな他者の特徴」の間の重回帰分析結果

	因子1 自分との相違による嫌悪	因子2 相手への妬みによる嫌悪	因子3 相手の傲慢さによる嫌悪	因子4 相手の自己中心性による嫌悪	因子5 相手の主張過剰による嫌悪	因子6 自分との類似による嫌悪	因子7 相手の外見による嫌悪	因子8 相手の話し方による嫌悪
説明変数								
外向性	.040	−.013	.129	**.199****	.126	.119	.000	.005
神経質	.044	.039	.068	.051	.063	−.045	−.006	.125
劣等感	**.147***	.026	.077	**.255*****	**.203****	.092	−.023	.001
顕示性	.125	.056	.133	−.014	.003	.025	**.169***	.083
攻撃性	**.134***	.108	.005	**.178****	.071	.057	.096	.089
持久性	**.141***	−.036	−.008	**.166***	.035	**−.175***	−.033	.070
進取性	−.069	−.054	.077	.077	−.004	−.039	−.052	.043
共感性	.051	.012	.091	.072	.098	.001	.014	−.011
非協調性	.044	**.223*****	**.184****	.091	**.144***	.109	**.282*****	.103
規律性	−.093	.012	−.052	.030	**−.136***	.004	.038	.009
重相関係数	**.088****	**.085***	**.110*****	**.166*****	**.108*****	**.075***	**.131*****	.053

（ ）内の数値は標準偏差。　F値の自由度は（1，258）である。＊p＜.05　＊＊p＜.01　＊＊＊p＜.001

（F（10, 249）＝2.408，p＜.01）であり，被調査者の「劣等感」（β＝.147，p＜.05）「攻撃性」（β＝.134，p＜.05）「持久性」（β＝.141，p＜.05）が選出された。「因子２：相手への妬みによる嫌悪」を目的変数とした重回帰分析では，決定係数R^2＝.085（F（10, 249）＝2.324，p＜.05）であり，「非協調性」が選出された（β＝.223，p＜.001）。「因子３：相手の傲慢さによる嫌悪」では，決定係数R^2＝.110（F（10, 249）＝3.603，p＜.001）であり，「非協調性」が選出された（β＝.184，p＜.01）。「因子４：相手の自己中心性による嫌悪」では，決定係数R^2＝.166（F（10, 249）＝4.959，p＜.001）であり，「外向性」（β＝.199，p＜.01）「劣等感」（β＝.255，p＜.001）「攻撃性」（β＝.178，p＜.01）「持久性」（β＝.166，p＜.05）の４つが選出された。「因子５：相手の主張過剰による嫌悪」では，決定係数R^2＝.108（F（10, 249）＝3.012，p＜. 001）であり，「劣等感」（β＝.203，p＜.01）「非協調性」（β＝.144，p＜.05）「規律性」（β＝－.136，p＜.05）の３つが選出された。「因子６：自分との類似による嫌悪」では，決定係数R^2＝.075（F（10, 249）＝2.022，p＜.05）であり，「持久性」が選出された（β＝－.175，p＜.05）。「因子７：相手の外見による嫌悪」では，決定係数R^2＝.131（F（10, 249）＝3.757，p＜.001）であり，「顕示性」（β＝.169，p＜.05）と「非協調性」（β＝.282，p＜.001）が選出された。これらの結果を Table 2 に示す。また，このうち決定係数R^2が５％水準で有為なものの中で，標準偏回帰係数βの値が.220以上のものを選び出して図示したものを Fig.1 に示す。

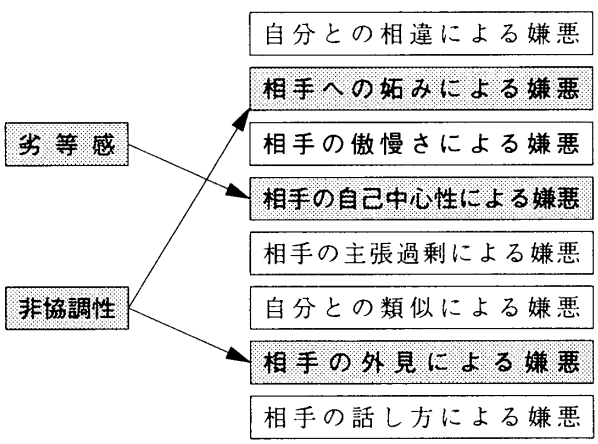

Fig.1 「被調査者の性格特性」と「嫌いな他者の特徴」の間の重回帰分析結果　（男女全体）

（R^2＞.05 で β＞.22のもの）

男性のみを対象とした分析

次に，男性のみを対象とした分析結果を述べていくことにする。

「因子４：相手の自己中心性による嫌悪」を目的変数とした重回帰分析においては，決定係数R^2＝.196（F（10, 122）＝2.973，p＜.01）であり，「劣等感」（β＝.250，p＜.05）と「攻撃性」（β＝.236，p＜.01）の２つが選出された。「因子６：自分との類似による嫌悪」を目的変数とした分析では，決定係数R^2＝.180（F（10, 122）＝2.685，p＜.01）であり，「持久性」が選出された（β＝－.331，p＜.001）。「因子７：相手の外見による嫌悪」を目的変数とした分析では，決定係数R^2＝.207（F（10, 122）＝3.177，p＜.001）であり，「顕示性」（β＝.285，p＜.01）と「非協調性」（β＝.360，p＜.001）が選出された。

女性のみを対象とした分析

続いて，女性のみを対象とした分析結果について述べていく。

「因子２：相手への妬みによる嫌悪」を目的変数とした分析では，決定係数R^2＝.160（F（10, 116）＝2.215，p＜.05）であり，「非協調性」が選出された（β＝.367，

Table 3
嫌いな他者の特徴への認知者の性差に関する分散分析結果

	男性	女性	F
人数	133	127	
因子１：自分との相違による嫌悪	3.35（.81）	3.55（.73）	4.55*
因子２：相手への妬みによる嫌悪	2.16（.73）	2.40（.73）	6.69**
因子３：相手の傲慢さによる嫌悪	3.73（.69）	3.46（.82）	8.40**
因子４：相手の自己中心性による嫌悪	3.36（.64）	3.51（.63）	3.71
因子５：相手の主張過剰による嫌悪	3.07（.78）	3.26（.92）	3.29
因子６：自分との類似による嫌悪	2.12（.60）	2.21（.69）	.87
因子７：相手の外見による嫌悪	2.90（.99）	2.70（1.09）	2.20
因子８：相手の話し方による嫌悪	3.84（.91）	3.60（.92）	4.63*

（ ）内の数値は標準偏差。F 値の自由度は（1，258）である。＊p＜.05　＊＊p＜.01

p＜.001)。「因子4：相手の自己中心性による嫌悪」を目的変数とした分析では，決定係数R^2=.167（F(10, 116)=2.326, p＜.05）であり，「劣等感」が選出された（β=.228, p＜.05）

3．嫌いな他者の特徴への，被調査者の性差の検討

被調査者の性別によって，嫌いな他者の特徴を表す8つの因子への反応に差があるのかを検討するために，1要因の分散分析を行った。その結果，「因子3：相手の傲慢さによる嫌悪」（F (1,258) =8.40, p＜.01）と「因子8：相手の話し方による嫌悪」（F (1,258) =4.63, p＜.05）においては，男性の方が女性よりも“嫌いな他者に当てはまる”の得点をより高くつけていた。また，「因子1：自分との相違による嫌悪」（F (1, 258) =4.55, p＜.05）と「因子2：相手への妬みによる嫌悪」（F (1,258) =6.69, p＜.01）においては，女性の方が男性よりも有為に高い得点をつけていた。結果をTable 3に示す。

以上のことから，男性は女性に比べて，相手の傲慢さや話し方によって嫌悪感を抱きやすく，女性は男性に比べて，自分との相違や妬ましさによって他者に嫌悪感を抱きやすいことが明らかになった。したがって，嫌いな他者の特徴に対して認知者側の性差が見られることが明らかになった。

考　察

本研究では，嫌いな他者の特徴について因子分析を行い，対人的嫌悪尺度を作成することを第1の目的とした。また，重回帰分析によって，被調査者の性格特性が嫌いな他者の特徴に及ぼす影響を検討することを第2の目的とした。また，被調査者の性差についても検討した。

因子分析によって，嫌いな他者の特徴についての8つの因子が抽出された。『自分との相違による嫌悪』『相手への妬みによる嫌悪』『相手の傲慢さによる嫌悪』『相手の自己中心性による嫌悪』『相手の主張過剰による嫌悪』『自分との類似による嫌悪』『相手の外見による嫌悪』『相手の話し方による嫌悪』の8つである。これから，それらについて1つずつ検討していくことにする。

自分との相違による嫌悪

まず，『自分との相違による嫌悪』であるが，これは具体的には性格，態度，考え方，意見，行動の仕方などにおいて自分とは異なっていると認知された他者に対しての嫌悪である。対人魅力の研究においては，他者の魅力を規定する要因として態度の類似性が挙げられている(Byrne, 1971)。Byrneは，社会的比較過程の理論に基づいて合意的妥当仮説を主張している。これは，人には自分の意見が正しいことを切望する欲求があり，類似した態度や意見を持つ他者は，この欲求を充足するために正の強化になるために好かれ，逆に類似していない他者は嫌われるとされている。また，人は類似した他者よりも非類似の他者の方が自分を嫌いであるとみなす傾向があり，自分が他者から嫌われることは負の強化となるために類似した他者の方が好まれるとされている。これらのことから，自分と異なっている他者に対して嫌悪感を抱くことは妥当なことと言えるかもしれない。また，この「自分との相違による嫌悪」においては女性のほうが男性よりも有為に高い嫌悪得点をつけていたことから，男性に比べて女性の方が自分と異質な他者に対して嫌悪感を抱きやすいと言うことができる。

相手への妬みによる嫌悪

次に，『相手への妬みによる嫌悪』である。これは，自分よりも優れていたり，自分にとってうらやましい面を持っている他者に対する嫌悪である。この妬みによる嫌悪へは，被調査者側の性格特性のうち「非協調性」が影響していた。つまり，「非協調性」が強い人は妬みによって他者に嫌悪を抱きやすいことが明らかになった。ちなみに「非協調性」とは，自分さえよければいいと思ったり，人のことを信用できないというように，周囲との調和を重んじない特性である。これについて男性のみを対象として分析を行った場合には有為な結果は得られなかったが，女性のみを対象とした分析においては「非協調性」がかなり強く影響していた。つまり，非協調性が強い女性は，妬みによって他者に嫌悪を抱きやすいと言えるだろう。これまでの研究においてBern & Robin (1984) は嫉妬を「社会的関係による嫉妬」と「社会的比較による嫉妬」とに分類している。今回取り出された因子『相手への妬みによる嫌悪』はこのうち「社会的比較による嫉妬」により近いものであると推測される。「社会的比較による嫉妬」とは，「何らかの次元（能力，所有物，業績，地位など）において，自分の方が優位か同等である，あるいはそうあるべきだと思っているにもかかわらず，実際には他者が優位に立っているときに生じる不快な感情」であると定義されている（坪田・深田，1990)。この社会的比較によって生じる嫉妬は，自尊感情の侵害が強い状況ほど，嫉妬，妬み，怒りといった感情が強くなるとされている（坪田，1991)。これらのことにより，抽出された嫌いな他者についての因子はこの社会的比較による嫉妬と同等のものであると考えられる。しかし「嫉妬」という言葉は一般的には3者関係によって生じるものだと捉えられるために，今回の因子にはあえて「嫉妬」ではなく「妬み」という言葉を使用した。また，これまでの社会的比較によって生じる嫉妬の研究の中で，「自分と類似している他者が，自分にとって重要な次元で優位な場合に嫉妬が強い」（Salovey & Robin, 1984）とされている。「相手への妬みによる嫌悪」と

「自分との類似による嫌悪」との間にやや強い相関が見られたことも，これに関連していると言えるかもしれない。厳密には妬み感情と嫌悪感情は異なるものなのかもしれない。しかし重要なのは，他者への妬みという感情が，本人には嫌悪感として感じられたということである。自分には妬みであるとは意識されないまま，それが他者への嫌悪という感じ方をされたということに大きな意味があるように思う。

相手の傲慢さによる嫌悪

次に『相手の傲慢さによる嫌悪』であるが，これは人を見下しているような人や，自分の方が優れているという態度をとったりする人に対する嫌悪である。いわば，人を見下してきて優位に立とうとする高圧的な態度を取る他者への嫌悪といえる。この『相手の傲慢さによる嫌悪』については，男性の方が女性よりも有為に高い得点をつけていた。つまり，男性は女性に比べて，自分を見下してきて偉そうな態度をとる他者に対して嫌悪感を抱きやすいと言えよう。

相手の自己中心性による嫌悪

また『相手の自己中心性による嫌悪』であるが，これは人の迷惑を考えない人やずるいところがある人のように，自己中心的な態度や行動をとる他者に対する嫌悪である。これと被調査者の性格特性との関連を検討したところ，「劣等感」が大きく影響していることが明らかになった。

相手の主張過剰による嫌悪

また，『相手の主張過剰による嫌悪』とは，外向的で思ったことをはっきり言う人や，口調が強い人や自信に満ちている人などへの嫌悪である。これは，『自分との相違による嫌悪』や『相手の傲慢さによる嫌悪』ともやや強い相関が見られた。思ったことをはっきり言う人や自信に満ている人は，ややもすれば威張っていて人を見下しているように見えるために，このような他者に対して嫌悪が生じるのかもしれない。

自分との類似による嫌悪

次に『自分との類似による嫌悪』について述べる。この嫌悪は，一見『自分との相違による嫌悪』と全く逆のように見える。対人魅力の規定因として，Byrne（1971）は態度が類似している他者に対して魅力は増大するとしていたが，これに対して Ajzen（1974）は，知覚者が類似した他者を好ましいと思うのは，他者が持つ自分と類似した特性をポジティブなものとして価値づけを行う場合に限定されるとしている。よって，自己と類似した他者がネガティブに価値づけられる特性を持っていると知覚されるならばその他者は嫌われると予測しているのである。抽出された因子『自分との類似による嫌悪』の項目内容としては，「自分の嫌な面とその人の嫌な面が似ている」「集団の中でのキャラクターが自分と似ている」などがある。Ajzen の理論に従えば，類似した他者がネガティブに価値付けられる特性を持っていると知覚されることによって，その他者に対して嫌悪感を抱いたと考えられる。また，自尊心の低い被調査者は自尊心が中程度あるいは高い被調査者よりも自己の短所次元を多く用いて他者を認知する（北村，1998）という研究もある。「自分の嫌な面と嫌いな他者の嫌な面が似ている」というのは，自分の短所次元を用いて他者を認知した結果であると推測することもできる。また，この『自分との類似による嫌悪』への被調査者の性格特性の影響を検討したところ，男性において被調査者の「持久性」がマイナスの関連を示していた。つまり，「持久性」が高い男性ほど，自分と類似している他者に対して嫌悪を持つことが少なくなると言える。

相手の外見による嫌悪

続いて『相手の外見による嫌悪』であるが，これは他者の顔や表情，体型などによって嫌悪感を抱くような場合である。これには被調査者の性格特性のうち，男性のみを対象とした分析において「非協調性」と「顕示性」が影響していた。「顕示性」とは人よりも目立つことや人から認められることを望む特性である。顕示性の強い人は，人の外見のような面にまず目がいきやすいのかもしれない。また，対人認知において顔が与える影響についての研究の中で，川西（1993）は，好ましい顔からはポジティブな性格が，好ましくない顔からはネガティブな性格が推測されることを明らかにしている。つまり，自分にとって好ましくない顔の他者に対しては，勝手にネガティブな性格を推測してしまいがちであるということになる。また，川西（1995）は，感情に直接訴えかける好意度のような次元において，顔に対する評価がより敏感になることを示している。さらに，川西（1998）は，顔と同時に提示される対人情報が多義的で曖昧なとき，認知者は顔から推測した人物像に依拠して印象の統合を図るとしている。このようなことから対人的な好悪感情においては顔の果たす印象機能が重要であると言えよう。だが，実際には第一印象において恐そうな顔だととか嫌な顔だと思ったとしても，話しているうちに最初の印象と変わってきて，次第に好意的な印象へと変化することもある。しかし，最初に顔によって嫌な印象を持った後でその人と相互作用する機会がなければ，その誤解は解けないままである可能性があることは否めないだろう。

相手の話し方による嫌悪

また，『相手の話し方による嫌悪』であるが，これは相手の話し方や口調などによる嫌悪である。この嫌悪に対しては女性よりも男性の方が有為に高い得点をつけていた。つまり男性は女性に比べて，相手の話し方によって嫌悪感を抱きやすいと言える。話し方や声によってその人のイメージが大きく左右されると言われるが，佐藤

(1995) は著書の中で，パフォーマンス学の立場から声のイメージをまとめている。例えば，高い声は緊張や興奮や自信のなさというイメージがあるとされ，鼻声は鈍感で非知性的な人間であるとイメージされるということである。このように，声や話し方によって，その人のイメージが決定されてしまう可能性があるのである。したがって，『話し方による嫌悪』も，他者の口調や話し方をもとにその人の内面を推測してネガティブなイメージを持った結果であると推測できる。

以上のように，8つの因子が取り出されたわけであるが，しかしここで嫌悪として感じられているものは，厳密に言うとそれぞれ性質の異なるものであると考えられる。齊藤 (1986) は，対人好悪の決定因を“相手の特性”“自己の固有特性”“相互作用”などの7つに分類している。それを参考にして考えてみると，今回取り出された8つの因子もそれぞれ相手の要因によるところが大きいもの，自己の側の要因が大きいもの，あるいは相互作用によって形成されているもの，などのように分類される可能性がある。そして，それぞれの嫌悪の主観的な感じ方は異なっているのではないだろうか。例えば，モヤモヤしたかんじがする，しっくりしないかんじがする，嫌いだけど特に気にならない，というようなものから，嫌いで嫌いでたまらない，などと嫌悪の感じ方にもさまざまな違いがあるかもしれない。今後はそのような主観的な感じ方についても検討していきたい。また，今回は嫌いな同性の他者についてのみ検討しているが，男性から女性への嫌悪，女性から男性への嫌悪というような異性に対する嫌悪について検討することも必要であろう。また，嫌悪感情が生じたときの自分への認知の仕方（例えば，嫌いでも仕方ない，嫌いな自分が許せない，など）とその後の相手への接し方（自分から距離を置く，こちらから接してみる，など）についても検討していく必要がある。

謝 辞

本論文を作成するにあたって，丁寧なご指導を頂きました吉良安之先生，山口裕幸先生，高橋靖恵先生に心より感謝いたします。本当にありがとうございました。

引 用 文 献

Anderson,N.H. (1968) : Likableness ratings of 555 personality-trait words. Journal of Personality and Social Psychology, **9**, 272 - 279.

大坊郁夫・奥田秀宇（偏）(1996) ：親密な対人関係の科学．誠信書房

古畑和孝 (1993) ：好きと嫌いの人間関係．有斐閣選書

古畑和孝 (1994) ：社会心理学小辞典．有斐閣

川西千弘 (1993) ：対人認知における顔の影響．心理学研究，**64**, 263 - 270

川西千弘 (1995) ：対人認知における顔の機能 ― 処理人物の複数化と顔の好ましさとの関連で ― 心理学研究，**66**, 261－268

川西千弘 (1998) 正確さへの動機づけが対人認知における顔の機能に及ぼす効果．心理学研究，**68**, 465－470

北村英哉 (1998) ：自己の長所，短所次元は他者認知によく用いられるか．教育心理学研究，**46**, 403－412

斉藤勇 (1985) ： 好きと嫌いの人間関係 ．エイデル研究所.

齊藤勇 (1985) ：対人心理学トピックス100．誠信書房.

齊藤勇 (1986) ：感情と人間関係の心理 ― その25のアプローチ ―．川島書店

齊藤勇 (1986) ：対人心理の分解図．誠信書房.

佐藤綾子 (1995) ：自分をどう表現するか 講談社現代新書

豊田弘司 (1998) ：奈良教育大学研究所紀要，**34**, 121－127.

坪田雄二・深田博己 (1991) ：嫉妬感情に関する実証的研究の動向．広島大学教育学部紀要，**39**, 167－173

坪田雄二 (1991)：社会的比較によって生じる嫉妬と自尊感情の関連性の検討．広島大学教育学部紀要．**40**, 113－117

坪田雄二 (1993) ：原因帰属が社会的比較によって生じる嫉妬感情に与える影響 ．実験心理学研究，**33**, 60－69

柳井晴夫・柏木繁男・国生理枝子 (1987) ：プロマックス回転法による新性格検査の作成について (Ⅰ)．心理学研究，**58**, 153 - 165.